

### 三週間後の報告(7月27日)

今日で三週間になります。その後、読むことが出来るようになりました。漢字は、昨日までに全部で 19 字に増えました。“目、手、足、耳、犬、猫、雨、鶏、舟、顔、苺、象、鳩、赤、水、猿、女、男、川”です。

この中で、愛子の好物の“毎”は、最初の一回で覚えて読むようになりました。

他に、1字“馬”を教えようと思って、2日続けてやりましたが、読めるようになりませんでした。よく考えてみますと、メリーゴーラウンドで、おもちゃの馬をよく見えていますので、知っていると思っていたのですが、実際の馬はまだ見たことがないのに気がつき、近くの競馬場の厩舎に連れて行って、実際の馬を見せてやりました。すると、その大きいのと、初めて見たために、驚いていました。

メリーゴーラウンドは非常に好きで、“馬”はすぐに覚えるだろうと思ったのですが、これは今まで“おうま”と言ったものを、ここで急に“うま”と言わせるようにしたため、なかなか“うま”とは言えないようです。一週間たった今でも、“うま”とは口から出て来ません。絵本の馬の絵を食事のテーブルの横に貼って、“うま”と言えるように練習しています。

絵本の絵の所に、今まで教えてやった漢字を書き入れてやったり、ひらがなの文字板に漢字を貼りつけてやりましたら、“鶏”の字を見つけて、“にわとり”という字だと家内に見せて言っていました。

やはり頭部損傷の関係で(天候の様子にも関係があるようです)、一週間のうち、大体1日か2日は非常に頭の調子が良くて、2日くらい良くない日のあるのを感じます。しかし、毎日1字ずつ覚えていくのを、家内ともども非常に喜んでいきます。

将棋のお話をお伺いしてから、早速買い求め、長男と毎日やっています。愛子は駒をますめに一つずつ並べたりして遊んでいます。

身体を丈夫にしてやることの大切さを痛切に感じましたので、夏休みに入ってから、近くのプールへ連れて行って、水に入れたり出したり、身体を干したりしています。去年の当時と比較して、皆のやっているのを見て、すぐに真似るようになったのに気づきます。

浮き輪にとまって足をバタバタさせたり、自分で泳いだり、浮き輪の上に寝て浮いたりして遊びます。

時々、近所の子供が家に遊びに来てくれますが、まだ一緒になって遊ぶことができません。しかし、一緒に遊ぶ時間も少しずつ長くなっているようには感じます。その他、感情の面の発達してきていることに気づきます。(以下略)

この手紙は、前回のものから二週間たった7月27日付の手紙です。つまり、実践を始めてから3週間の指導の結果が、報告されたものです。

この報告の中で、大変にいけないことをやってしまったことが報告されています。お父さんはまだそれに気づいていませんが、“馬”を“うま”と言わせようとこだわっていることです。

漢字は“目で見る言葉”です。だから、“耳で聞く言葉”と一緒に教えるのが良いのです。ところが、愛子ちゃんはすでに“おうま”という発音で、“耳で聞く言葉”を身につけていました。しかも、愛子ちゃんにとっては、馬は“おうま”というものであって、“お馬”という意識はないのです。

こういう場合は、“馬”は“おうま”でも結構なのです。もしも、それでは気がすまないというのなら、カードの方を“お馬”と改めるべきです。いずれにしても、“うま”と言わせようと固執することは間違いです。もっと幼い子でしたら、“犬”は“ワンワン”猫は“ニャンニャン”でも良いのです。

一体、漢字を読むということは、その字の意味することを理解することであって、単に発音するだけのことではありません。発音できても、

意味がわからなかったら、何にもならないのです。

だから、漢字の教育では、その字の意味内容の理解を重視して、例えば“馬”という字だったら、本当の生きた馬を見せた上で、これを教えることが大切なのです。この点では競馬場の厩舎まで出掛けて行ったお父さんの教え方は、良かったのですが……。

“実物(本当の馬)”“言葉(うま)”“漢字(馬)”この三つを頭の中で結合させることが、石井式漢字教育では特に重視することにしていて、私の著者では、このことがいつも強調されています。しかし、実物を体験させることが大切だとは言うものの、これにはなかなか努力のいることで、愛子ちゃんのお父さんの努力には心を打たれました。

もう一度、“おうま”の問題に戻りますが、漢字の読み(発音)とは“言葉”のことですから、現在子供の使っている言葉以上のものを要求してはいけません。例えば、幼児にはサ行の発音がむずかしくて、これをタ行で発音します。だから、汽車は“キシャ”と言えなくて“キチャ”になります。

この場合、「キチャではなくてキシャだよ。さ、キシャと言ってごらん」と子供に要求してもだめです。このような発音上の問題は、ほうっておいても発音能力が向上すれば、自然に改まりますから、直そうと思わないで、時期を待った方が良いのです。

ただ、子供がキチャと言うのに合わせて、大人がよくキチャという言い方をしますが、これではいつまでたってもキシヤになりません。子供の発音を直す必要はありませんが、大人はいつも正しい発音をするように、心がけなければなりません。

例えば、子供が“汽車”をキチャと読んだら、「そう、この字はキシヤだね。よく読めたね」と言って、これを認める一方で、正しい発音を聞かせることが大切です。だから、“馬”をオウマと言ったら、「そう、この字はウマという字だね。よく読めたね」と言っていれば良いのです。そのうちに必ずひとりでの直ります。

将棋の話が出ていますが、これは愛子ちゃんの家を初めて訪問した時、手先、特に指先を使う仕事や遊びの大切さを奨めたことがありましたが、将棋はその一つだったのです。

まず目に一つずつきちんと並べること。並べた将棋を人指し指を使って立てること。また、振り将棋といって、金将四枚を振り投げて遊ぶ遊び方など、楽しく遊べて、その間に指の働きを巧みに、かつ敏感にさせることをねらった遊びを教えてやりました。

頭の働きは、頭を使うことによって活発になるものですから、頭を使わせるように仕向けることが大切であることは勿論ですが、何と云っても身体が丈夫でないことには、頭を使おうという意欲が生まれません。

そこで、頭を使わせること以上に、まず身体を丈夫にすることの重要性を説きました。プールでの水遊びの報告は、そういうことでなされているのです。

便りの最後に「感情の面の発達してきていることに気づきます」と書かれてあります。この点に御注意頂きたいと思います。幼児が漢字を覚えますと、急に幼児が人間らしくなることをこの教育に従っている方は、どなたも指摘します。

知性と感情(情操)とは別個に独立して発達していくものではなくて、互いに関係し合い、影響し合って発達していくものでしょう。そして、知性も感情も、言葉によって豊かになり、発達するものですから、漢字教育が知性を育てるばかりでなく、感情を豊かにするのは当然のことなのです。

よく、「幼児期は情緒を豊かにする時期だから、漢字のような知育は控えるべきだ」という意見を聞きますが、そういう意見はこの事実から考えてみて、誤っていることがよくわかり頂けると思います。